慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Andre Gayot, Francois Guizot et Madame Laure de Gasparin (1830-1864), Paris
Sub Title	
Author	藤田, 寅一(Fujita, Toraichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.1 (1935. 4) ,p.171- 172
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350400-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

單に斷案を下してしまはずに今少し精密に系統を定めていたゞきたい。十八頁から廿二頁までにわたり著者は神功紀の記事を論じ、眞木灰納瓠と云ふ文句は實は槇の木の舟に瓠を浮揚具として結びつけるものであらうと推定されてをるが、かういふ神話的所傳の解釋に著者の意見は少し合理的に過ぎる嫌ひはあるまいか。瓠が水の神と關聯してゐた傳承を顧ると矢張り此の條の解釋は海上を平穩ならしむるための呪術的行爲として說く方が安全ではなからうか。著者は灰を舟に對する古音となしへサキのへを仲介となし、朝鮮語 pai と結びつけようとされてをるが一體舟の名前にはpとかbとかのついた水上に物の浮く狀を示す擬聲詞的の要素あり、支那でも江南地方で舟のことを艑などと呼んでをる。日本の舟の古語を朝鮮語だけに結びつけるのはどうかと思はれる。

以上いろ〳〵私見を述べたが西村教授が獨力此の古代船舶研究の難問題に從事し、種々珍奇な材料を提供され、吾人を啓發して吳れる功績は感激に堪へぬ所であり、將來益々此の方面の開拓に從事せられんことを期待する（松本信廣）。

André Gayot, François Guizot et Madame Laure de Gasparin (1830—1864), Paris.

歷史家であつたギゾーは、同時に政治家でもあつた。一八四八年の二月革命によつて、政治家としては失脚したが、幸ひ彼の歷史に對する深い理解が、後世の史學研究者に幾多の有益な材料を遺してゐる。

彼は二月革命に追はれて、一年餘の間イギリスに亡命してゐたが、翌年の夏には歸國して、Val-Richer のシャトーに立籠り、筆をとつて餘生を過した。第十九世紀外交史の研究に缺くべからざる材料である彼の Mémoires pour servir à l'histoire de mon temps, 9 vol. も、その間の成果である。

ギゾーには、故鄕ニーム時代からの親友があつた。親友の妹 Laure (1790—1864) は、一八一三年嫁いで Gasparin 夫人となつたが、ギゾーは、彼女が死去するまで文通を續けた。

ギゾーから彼女に送つた書簡四百五十通を年代順に配列し、之に目次と索引を附したのが本書である。一八三〇年から一八六四年までの三十五年間に於けるギゾーの學究的生活、政治家的轉變が、これによつて窺はれ、特に隱遁後の部分によつて、ナポレオン三世の治世に對する彼の客觀的觀察を知ることが出來、興味は盡きない。

但し彼が政府の首腦者であつた時代の分でも、重大事件が勃發した時には、私信を認める餘裕がなかつたのか、或は書簡が殘つたにしても本書出版に際し、その部分を除いたか兎に角、かへつて數は少くなつてゐるから、史上のデートに從つて、本書を繰つても失望することがある。この點は、恰も同時代の The letters of Queen Victoria に到底及ばない。蓋し私書集であれば、已むを得ぬ缺陷でもあらう。

然し乍ら、數々の書簡を綿密に吟味することによつて、凡ゆる角度からギゾーとその時代を再認識することが出來よう。ギゾーの書簡集としては、以前にも Letters à sa famille et à ses amis. Paris, 1884. 等があるが、表題の書は勿論未發表のものば

かりであつて、（22cm×13.5cm.）六四七頁、ギゾーとGasparin夫人などの肖像畫、及び三通の手紙が寫眞版になつて掲載されてあり、吾々に一層の興味と親しみを感ぜしめる。（藤田寅一）

西洋史概說（內藤智秀著　教育研究會發行）

人道主義を容れ、傳說を重んじ、社會的平和發展を目的とする民主主義を標榜する著者は此處にその歷史的智識を傾けて西洋文明を概說し、以てその世界國家建設の遠大な希望を謙讓な態度で披瀝してゐる。

先づ之を古代、中世、近世、現代の四篇に分ち、古代篇はローマまで、中世篇は北米合衆國の獨立まで、近世篇はフランス大革命に筆を起して世界大戰前に至るものであり、時代區劃の上からは何等特徵を見ないが、政治社會的變遷に重點を置いたその記述法は期せずしてペリクレス時代の描寫を分割させ、或はアレクサンドル大王時代の章にペルシャ戰役やペロポネスス戰役を說く結果にまで及んでゐる。然しながら又他面に於てそれはギリシャ、ローマの文物制度をそれぞれ巧みに包括し、比較的明瞭な印象を讀者に與へてくれる。著者の最も得意とする所は近東諸國の變遷にあり、從つてバルカン、トルコを中心にその蘊蓄を傾けて東方問題を論ぜらるるあたりが、斷然類書を凌ぎ、本書の最も優れた方面であらう。

最後に國際聯盟の新任務を說き、佛外相ブリアンの提唱したヨーロッパ聯盟にも言及し、黃禍論と白禍論を述べて大アジヤ主義の發生を論じ、民族主義による自己の立場を表明して結語とする。全卷七七九頁の大册、脫字、誤字、異說もないではないが、ともすれば不足勝な我等の西洋史に關する知識の理解と普及に對し資する所は決して少くはないであらう（近山金次）。

世界大戰原因の研究（鹿島守之助著　岩波書店刊行）

大戰前の同盟條約の多くに『何等挑發に基かずして攻擊せられんとするとき…』の句が含まれてゐる如く、戰爭にあたり、交戰國の何れが挑發せしかは問題となる所であり、交戰國何れも對手國の挑戰により、やむなく應戰したものであると世界に認めさせんと努力するのである。一九一四年の世界大戰勃發の時にも英佛露獨墺等は外交文書を發表し、その對手國の非をならしたのである。この結果として、その後しばらくと云ふものは各國の學者、政治家は互に對手國のみに開戰の責任ある如くに論じたのであるが、漸次戰爭の興奮がさめるに從ひ、多くの學者は一方のみにその責任を歸することの非なることを見出し、その責任は兩方の側にあることを認め出したのである。鹿島氏も又この責任は兩方の側にて負ふべきものであるとの立場をもつて本書は書かれてゐるのであるが、然し結論に於て、ドイツロシヤの責任を比較された時にドイツ及びオーストリヤがその和戰何れかを決する地位にあり、之を決する權限の存する所に最大の責任も亦存すると書かれてゐるので、全書を通じて、大體に於てドイツ側を非とした調子が見られるのである。

世界大戰の間接の主要原因として多く三國協商三國同盟の對立を云ふのであるが、卽ち兩者の對立に責任ありとするのであるが、